全国特別支援学校知的障害教育校PTA連合会

全知P連だより

令和３年
１月15日発行
No. 13

つたえつなぐ
支援のこころ

素敵な組織には素敵な人が必ずいる
未来につなげたい想いをご紹介します

だれもがプレーヤー

一般社団法人 日本ドッヂビー協会（DBJA）代表理事／理事長
稲垣 敬雄 様

近年、東京オリンピック・パラリンピック開催の影響もあり、「障害者スポーツを通じた共生社会の実現」を掲げたパラスポーツの体験や普及啓発が進められています。しかし、一方で、知的障害のある人の中には、ルールの理解が難しく参加をあきらめてしまうことも少なくありません。

日本ドッヂビー協会（以下、DBJA）代表理事の稲垣様は、高度な技能を身につけたり、競技志向のスポーツに参加したりするだけではなく、レクリエーションとしてスポーツを楽しむことに焦点を当てて、日々ドッヂビーの普及に努めていらっしゃいます。お話を伺っていると、障害の程度、さらには障害のあるなしに関わらず、スポーツに親しむ人や機会が増えること、自己実現、社会参加につながることへの期待と熱い思いが伝わってきます。

教えていただきました

誘われてすぐにやれるスポーツ

ドッヂビーという競技をご存知ですか？　柔らかく、当たっても痛くないドッヂビーディスク（※1）を使い、いわゆるドッジボール形式で行うゲームのことです。正式には「ディスクドッヂ」と言いますが、このゲーム自体を「ドッヂビー」と称することが一般的です。

［ドッヂビーディスク］（※1）

ウレタンを、ナイロンで包んでいます。学校の備品として導入されたことで、小学生世代への普及は目覚ましく、全国各地でドッジボール形式の大会が行われています。特別支援学校でも普及が進んでいます。

DBJAは2008年に設立しました。特別な技能を持った選手でなく、年齢性別を問わず、スポーツを苦手と思っている人たちも楽しむことができるような活動を目指し、だれもがプレーヤーであることを基本理念としてきました。DBJAでは、これらの理念を統一認識とするために、下のスローガンと、コンセプト・シンボルマークを制定しています。

年齢・性別さらに学歴、国籍や肌の色を問わず
すべてのヒトに『笑顔』を！
“DODGEBEE”『Smile for All』

Smile for All

<障害者プロジェクト>

スポーツに親しむ人・機会を増やすことを理念に活動するDBJAでは、障害のある人にとってもスポーツに親しみやすい環境を創出すべきであると考え、2016年に「障害者プロジェクト」を設置しました。

DBJAには、障害者プログラムがあります。DBJAの推奨する公式4種目（※2）は、競技者自身のレベルや志向によって幅広い選択をすることができます。これまで、スポーツに対してさまざまな点で障壁を感じていた方や、レクリエーション志向の方も参加しやすくなっています。

ディスクドッヂ　ユニファイド部門の特別ルール

◎プレーヤーの区分
　メインプレーヤー・・・障害のあるプレーヤー
　サポーター　　・・・障害のないプレーヤー
◎プレーヤーの人数
　1ゲームに出場するプレーヤーは13名以下。サポーターはプレーヤー人数の50%以下（13名の場合、最大6名）とします。

？ドッジ？ ドッヂ？

通常、ドッジボールは「ドッジ」と表記しますが、ドッヂビーは「ドッヂ」と、あえて「ヂ」としています。「ドッヂ」と言えば＝ディスクだと、一般的に認知されることを目指しています。

②

④

［DBJAが推奨する公式4種目］（※2）
①ディスクドッヂ　　…ドッジボール形式
②ゴールドッヂ　　…ハンドボール形式の団体戦
③ドッヂディスタンス　…個人の遠投種目
④ディスゲッタードッヂ…個人やペアで複数回対戦するチーム戦の的抜き種目

<Unified Flyingdisc Session（UFS）の実践>

障害のある人もない人も、区分けなく行います。当たり前に障害のある参加者がいることの実現を目指しています。

日頃の協会活動の中で、障害のある人が参加している場は残念ながら一握りとなっています。どうしたら参加しやすいか、障害者プロジェクトチームを中心に試行錯誤を繰り返してきました。

そして、現在では、フライングディスクの基礎的な講習要素から、あそび型の練習を経て、ゲームの体験機会までをパッケージングしました。

大会でも、講習会でもない、新形態< Session >の技術習得イベントが【Unified Flyingdisc Session（UFS）】です。

<これまでの活動事例>

⬆ UFSイベント
障害のある人もない人も一緒に楽しみました。皆さん、素敵な笑顔です。

DBJAの障害のある人に関する活動としては、先述したUFSをこれまでに4回実施し、その他に、行政や学校、総合型地域スポーツクラブ等からの依頼を受け、約40回の講習会やイベントを行っています。タイ、インドネシア、ラオスに赴き、海外の障害者に向けた講習会の実績もあります。

また、スポーツ庁が推進する「Specialプロジェクト2020（特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業）」の事業として、筑波大学附属大塚特別支援学校が実施する「筑波大塚チャレンジスポーツプロジェクト（TOCSP）」内に「大塚ドッヂビークラブ（ODC）」が創設され、DBJAスタッフが技術指導を行う定期的な練習会の開催や、大会出場へのサポートを行っています。

TOCSPおよびODCには、在校生や卒業生、ご家族にも参加していただいているだけでなく、大学生を中心とするボランティアの方々にもご参加いただき、ドッヂビーを通じた交流の輪が広がっています。

伺いました

DBJAが今後目指すこと

今後は、UFSをできるだけ多くの回数を継続して開催していくことにより、

- ●DBJAと各関係団体における「ノウハウ」の蓄積
- ●障害者スポーツ分野における「人脈」の構築と「人材」の発掘・育成
- ●UFSにおける実施コンテンツの適正評価とより良い取捨選択

を進めていきたいと思っています。DBJA公式4種目において、障害のある人とない人が一緒にチームを組んで参加する「Unified大会」を開催すること、さらには、DBJA主催大会において「障害者部門」は存在せず、当たり前に障害のある選手が参加していることを目指していきたいと思っています。

その第一歩として、2021年2月11日（木・祝）には、毎年「全日本障害者・高齢者フライングディスク競技大会」が開催されている東京・駒沢オリンピック公園にて、「ユニファイドフライングディスクセッション＆ドッヂビー関東大会」を開催します。通常の【UFS】に加え、【ディスクドッヂ】と【ドッヂディスタンス】のUnified大会の開催、それと同時に【ゴールドッヂ】の関東大会を開催することにより、障害のある人とない人が同じ時間・空間でドッヂビーを楽しむ企画となります。

特に、ドッヂディスタンスには「チャレンジドカテゴリー（障害のある人の部門）」も設けられており、日本記録更新のチャンスとなっています。もちろん、ドッヂビーを楽しむことが一番の目的ですが、日頃の練習の成果を発揮する場になればと思います。駒沢がフライングディスク・ドッヂビーの聖地になるよう、是非とも今後も継続して開催していきたい企画となっています。

メッセージ

特別支援学校に通う皆さんへ

現在実施しているUFSやディスクドッヂのUnified部門は、障害のある人だけでなく、家族や友人・学校の先生・介助者など、日頃から一緒に生活している人たちが気軽に楽しむことができるような内容となっています。ドッヂビーを通じて、スポーツの語源でもある「気晴らし」をすることで、今よりもさらに豊かな日常生活を過ごしてみませんか？

ホームページはこちらから…

＊日本ドッヂビー協会
Dodge Bee of Japan Association

www.dbja.jp

もうひとつの言語

表現活動研究所ラスコー　中津川 浩章 様

中津川様が、国内の障害のある人の表現作品に初めてふれたのは、「社会福祉法人みぬま福祉会川口太陽の家」の利用者さんの、あるポストカードでした。そして、学生時代にヨーロッパでアール・ブリュット（※1）にふれて関心をもっていたこともあり、次第に障害のある人の「もうひとつの言語」としての価値を見いだしていくことになります。

以後、長きにわたり、美術家としての制作活動と同時に、各地の福祉施設・学校でアートディレクターとして携わっています。また、展覧会の企画、プロデュース、キュレーション（※2）や公募展の選考委員、ワークショップなど、障害のある人たちの表現活動に関わり、福祉・教育・医療と多様な分野で、アートとの関係性を問い直す活動に取り組まれています。

『なぜ障害のある人たちから魅力的な作品が生み出されるのか。そこにはもちろん障害特性の反映によるものもあるが、何より、自分をわかってもらいたい、感じてもらいたいという強い思いがあるからだ。うまく考えや気持ちを伝えられない、意思の疎通が難しい、という人たちにとって、表現活動はとても重要なコミュニケーションツール。その切実さゆえに、クオリティの高い作品が生まれる。芸術革命とはまさにコミュニケーション革命だと思う。』と中津川様は話します。

表現活動が社会をつなぐツールとなり、それが現場にフィードバックされ、利用者の方たちの自信と尊厳を育て、障害のある人たちの社会参加を後押ししています。本誌では、中津川様の多くの取組の一部をご紹介します。

中津川 浩章 様　美術家／アートディレクター

アーティストとして国内外で展覧会多数
一般社団法人 Art InterMix ／代表
一般社団法人 Get in touch ／理事
一般社団法人 Arts Society Asian Network ／理事
ＮＰＯ法人エイブル・アート・ジャパン／理事
社会福祉法人みぬま福祉会・工房集／アートディレクター
認定 NPO 法人アール・ド・ヴィーヴル／
理事・アートディレクター
日本財団 DIVERSITY in the ARTS ／選考委員
Art to You ！東北障がい者芸術全国公募展／選考委員
埼玉県障害者アート企画展／ディレクター

就労継続支援B型作業所 アール・ド・ヴィーヴル

http://artdevivre-odawara.jp/about/artdirector/

中津川様は、日本ダウン症協会の小田原支部「ひよこの会」の方から、『アートを仕事にする福祉施設をつくりたいのですが、協力していただけませんか』との切実なご相談を受けたことをきっかけに、事業所の立ち上げに関わり始めました。最初は全く何も基盤のないところからのスタートでした。10年の月日をかけて準備する計画を立て、徐々に活動を広げると同時に、「ひよこの会」の皆さんの日頃のネットワークで、協力してくださる方々や企業が集まりました。そして5年目で就労継続支援B型作業所（アール・ド・ヴィーヴル）の開設に至ります。

中津川様は、アートディレクターとして携わると同時に、表現された作品を社会に発信して工賃としてフィードバックするという、新しい障害者の働き方のシステムを構築してきました。例えば、提携した企業に利用者の方の作品を貸し出し、レンタル料をいただきます。数か月ごとに付け替えをし、その作業には利用者の方も一緒に同行して、絵画を掛ける場所を相談します。企業からも、職場の雰囲気があたたかくなるとの声をいただくそうで、現在40社ほどの企業と契約をされており、互いに良い関係を築くことができています。

今年4月からは、生活介護事業所も開設予定です。「どんな障害があっても、働くことは権利である」という理念のもとに、工賃もあります。新たな社会の担い手となる皆さんの活躍が今から楽しみです。

社会福祉法人
みぬま福祉会　工房集

工房集は福祉施設で、社会福祉法人みぬま福祉会を利用するメンバーの拠点として2002年に開設しました。既存の仕事に合わなかった一人のメンバーをきっかけに、障害の重い人たちの仕事づくりを模索し続けたことから始まりました。中津川様は工房の建築前から関わり、表現活動を社会につなげるための説明会などを行ってきました。当初は、前例がほとんど無いことから、アートと仕事を結び付けにくい方もおり、立ち上げまでに苦労もありました。

しかし、「今生きている人生をどう生きるか」「今の生活をどう豊かにするか」、それはアートの活動から生み出されるのではないか。施設長をはじめ支援者の皆さんの強い思いも後押しをして、開設に至りました。そして年月を経て、利用者の皆さんのいきいきした姿や笑顔が、工房集を大きくしていきました。保護者の方も積極的に関わってくださっているそうです。

現在、法人全体で11か所のアトリエを中心に150名程が仕事としてさまざまな表現を生み出し、国内外での展覧会への出展や、企業との協働など、活動が多岐に渡っています。

アトリエ
織り、絵画、漫画など、20名程のメンバーが制作に取り組んでいます。

ショップ
織り、ステンドグラス、アクセサリー、文具などのオリジナルアートグッズが並んでいます。

ギャラリー
空間を仕切る一本の柱が印象的なギャラリーでは、企画展やグッズ展を定期的に開催しています。

http://kobo-syu.com/

学校と芸術団体の連携
「自由な美術活動空間」

東京都では、優れた芸術文化に関する子供たちの理解促進を図り、継続的な連携がのちにレガシーとなる取組となることを目指す「文化プログラム・学校連携事業」を推進しています。

実施校の一つである東京都立永福学園とアートディレクターの中津川様、株式会社自然堂（じねんどう）が連携して、美術創作スペース「自由な美術活動空間」を開催しています。豊富な画材を自由に使い、「思いっきり自分だけの作品を作りたい！」「今まで作ったことのない作品を作りたい！」という思いを叶える機会と場所を提供しています。

「星雲　誕生」
大沼森彦さん（20歳）の作品。特別支援学校卒業生。中学部の頃から絵画を始めました。現在は休日に絵を描き、6月には三人展を開きました。

メッセージ

特別支援学校に通う
児童・生徒、保護者の皆さんへ

「障害は人にあるのではなく社会とその人との間にある」という考えはとても正しいことだと思います。でも、そうはいっても身体が思い通りに動かないことや言葉がうまくアウトプットできない不自由さは生きていくうえでやはり大変なことです。

表現することは、優れたアート作品をつくることやアーティストになることだけが目的ではありません。大切なのは、自分の心の声を他者に届けることにあります。不自由さがあるからこそ生まれてくる想いの強さや深さ、そして、普通とは少し違っているように見える感覚の鋭敏さや緩さ。そうしたユニークさはアート・表現となった時に反転して魅力となり、オリジナリティとなって現れます。

作品から作者を感じ読み取って共有していくことは、障害がある人たちの存在を可視化することでもあります。「有用性」にあまりにも価値を置きすぎた現代社会。「ゆっくりしていること」「できないこと」「見えないこと」「聞こえないこと」の持っている価値が、社会を変える可能性を開く鍵になるかもしれない。ひとり一人の多様性を受け入れ尊重すること。それが当たり前になれば、すべての人にとって生きやすい社会になるのではと思います。これからの子どもたちの生きる未来が、今より少しでも幸せな世界であってほしいと願っています。

他にもさまざまな活動に取り組まれています。
ホームページはこちらから…

＊表現活動研究所ラスコー
https://www.lascaux-labo.com/

＊ Art InterMix
障害者アート・アーティストの発掘もなさっています。
理事長は中津川様、副理事長は東ちづる様（女優）柳貴男様（広告代理店勤務）です。
https://www.artintermix.jp/

＊画家としての中津川様のホームページ
8月には作家の田口ランディ様とのトークイベントがありました。
https://hiroaki-nakatsugawa2.webnode.jp/

（※1）アール・ブリュット
自身の内側から湧き上がる衝動のままに表現した芸術。「生（き）の芸術」、「加工されていない芸術」と訳される。

（※2）キュレーション
特定のテーマに沿って収集し、整理して見やすくまとめること。

心に寄り添う就労支援

株式会社テイクアンドギヴ・ニーズ　人事部 担当部長
宮﨑 家光 様

全国でウェディングプロデュースを手がける婚礼最大手の株式会社テイクアンドギヴ・ニーズ。（以下、T＆G）オリジナルウェディングにこだわり、直営店の全国展開を業界に先駆けて始めたことで「ハウスウェディング」が全国的に認知されるきっかけとなりました。

障害者雇用においては、障害者が十分に力を発揮できる適切な就労機会の拡大と、都立特別支援学校の就労支援（インターンシップ）への貢献が評価され「特別支援学校就労支援アドバイザー」に選出。「東京都教育委員会事業貢献企業」等、数々の賞を受賞されています。

雇用の場は夢の世界に行ったようなウェディング施設のバンケット、チャペル、ガーデン。クリーンスタッフと呼ばれる障害者が一糸乱れぬ制服姿で清掃業務を行っています。

『わが社の仕事は幸せに携わる仕事、幸せを作り出す仕事です。障害者にも社会に出て働くチャンスを作ることで、幸せを作り出せたらと考えてきました。重度障害であっても仕事は立派に行うことができます。習得までに時間がかかったりコミュニケーションに配慮が必要なことも事実ですが、それは私たちが勉強していく課題と考えています。まずは私たちが彼らに夢中になる。結果、彼らが仕事に夢中になる。努力は夢中には勝てません！』と楽しそうに話してくださるのは、T＆G障害者雇用の立ち上げから担当してこられた宮﨑様。

語ってくださる現場での出来事や、その時の人への思いは障害者本人だけではなく、保護者や支援者にも寄り添っておられるのが伝わってきます。『僕らは彼らの人生を預かっているんだ。』その言葉には働くスタッフの悩みや夢を自分事として向き合い寄り添ってくれる、温かさと安心感を抱きます。 だからでしょうか、宮﨑様の周りにはいつも人が集まってくるという印象を受けます。

コロナ禍でも 障害者の法定雇用率が0.1％引き上げになります【2.3％】

障害に関係なく希望や能力に応じて、誰もが職業を通じた社会参加のできる「共生社会」実現の理念の下、すべての事業主には、法定雇用率以上の割合で障害者を雇用する義務があります。障害者雇用率制度の法定雇用率が2021年3月1日から変わります。詳細は厚生労働省ホームページ内のリーフレットを参照ください。

厚生労働省

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/shougaishakoyou

テーブルセッティングがされている状態で清掃業務を行います

伺いました　T&Gらしい障害者雇用『ひとり一人を大切に』

スタート時、社内には障害者雇用についてのノウハウが全くありませんでした。福祉施設で働いたことのある経験者を採用し、その社員と共に福祉就労先をリストアップ、A型B型にはこだわらずに飛び込み、人材とT＆Gの出会いを求めて歩く日々でした。2007年12月に初任採用6名。現在では30名（うち90％は重度障害・身体2名含む）の障害者がクリーンスタッフとして就業しています。採用は福祉就労先からの転職や新卒等いろいろです。雇用率は2.61％（2020年9月現在）。人材重視で採用するため、ひとり一人の状態がいつ変化するとも限らないことを見込み、法定雇用率以上の体制になることもあります。それだけ穴を開けられない仕事を担っているということです。

首都圏5カ所にあるウェディング施設を、5～6人のクリーンスタッフと1人のサポートスタッフで編成し、チームに分かれて清掃業務を行います。

チームを差配するサポートスタッフは社内公募で募るため、前職がウェディングプランナーという人もいます。サポートスタッフは日々の指導の困難さを感じ、行動援護従業者や強度行動援護従事者・ガイドヘルパーなど障害者等が行動する際に生じ得る危険を回避するために必要な資格取得をし、さらにさまざまな教材の工夫と指導改善をしています。個別の支援計画・指導計画を作成し、それに基づいた必要な支援を行うことを大切にしています。

職場の一つ
青山迎賓館

仕事を進めやすくするため、床に「青マグネット」と「仕切り棒」を置きます。
これで空間認知が困難なスタッフもどこまでやったか、どこまでやればよいのかがわかります。

仕事は1人で1つのポジションを完結させるのではなく、複数のクリーンスタッフで手分けをして行っていきます。そうすることで、ひとり一人のスピードや得意なことが異なっても、得意分野を活かすことができます。その人ができる作業を担当することで、全体が効率よく仕事を仕上げることができます。

多種多様な能力が最も発揮できる仕事を見つけ出し、それぞれの強みを活かせるよう適材適所に配置することで「障害者の成長を支援する」ことを目指しています。

日常業務以外では、社員総会等の会社行事にも他の社員と同様に参加します。経験や学びの機会を作ることが仕事へのモチベーションの起爆剤にもなっています。ワクワクドキドキすることは人生を豊かにしてくれます。海外に行く社員旅行にも参加しましたが、そのために成田空港に行く練習はみんなで10回もしました。

T＆Gの障害者雇用は、働く意志と能力を有する障害者に対し、ひとり一人がいきいきと自信をもって働ける環境を提供し、働き甲斐のある社会人としての生活の場を与えることが企業としての社会的使命であり、その社会的使命を果たすことはT＆Gの掲げる企業理念「人の心を人生を豊かにする」ということに通じるものであると考えています。

国際協力機構（JICA）視察団 企業における障害者雇用の先進事例として T&G青山迎賓館を訪問

2020年1月27日、国際協力機構（JICA）視察団の受け入れを青山迎賓館で行いました。この視察プログラムは「地域活動としての知的・発達障害者支援」として1980年よりJICAが公益社団法人 日本発達障害連盟に委託のうえ行っているもので、今回はアジア・南米他12か国から14名の行政官やNGO職員等が参加しました。担当者からの事例を紹介し実際に障害を持つ従業員の就労の様子を見学し理解を深めていただきました。

（詳細はT＆Gホームページ
ニュースリリース 2020年1月30日）

凛として働く姿や満面の笑みで楽しむ姿はこちらから

T＆G
あったかYouTube

＊【T＆G】2014年 障害者雇用
『クリーンスタッフの仲間たち』
https://www.youtube.com/watch?v=oCopOf_TmsM

＊【T＆G】2015年 社員研修旅行「おおきなわ」in沖縄
https://www.youtube.com/watch?v=35SvD1oP6nA

＊【T＆G】恋するフォーチュンクッキー
テイクアンドギヴ・ニーズグループ STAFF Ver.／
AKB48［公式］
https://www.youtube.com/watch?v=Qkr2OqbmG88

ホームページはこちらから…

いま 伝えたいこと

間もなく、東日本大震災の発生から10年を迎えます。

全知P連では、これまでの間、被災地域の復旧・復興と一日も早く穏やかな日常が戻ることを願い、大規模災害から子供たちの命を守るための「防災」への取組をすすめてまいりました。福祉防災の専門家、被災者支援の専門家、特別支援学校で防災教育を推進している先生方にご指導いただき、「防災研修会」や「防災ワークショップ」を継続的に開催することができました。

研修会やワークショップの内容は、会員の皆様との共有を図るため、機関誌にてご紹介してまいりましたが、ご覧いただけましたでしょうか。

以下、東日本大震災を踏まえ、全知P連が防災に取り組んだ一部をご紹介します。

- 「知的障害特別支援学校における事業継続計画（BCP）策定のためのガイドライン」の作成
- 「東日本大震災被災地視察&ヒアリング（報告書）」の作成
- チェック表「これだけは準備しておきたい！（家庭版）」の作成
- 全国研究協議大会、全国役員・都道府県代表者連絡協議会での防災に関する「提言」「講演会」
- 全国研究協議大会分科会でのPTAによる防災活動の実践事例の発表
- 全国研究協議大会会場内での防災展示：「100円ショップで購入できる防災グッズの展示」「防災教育用アプリの紹介」「PTAが作成した防災ベスト・支援ファイルの紹介」「全国のヘルプカードの展示」「帰宅支援バッグ・自助バッグの展示」
- 防災冊子の編集等：「安全・安心な場を創る」（編集）「障害児・者のいのちを守る」（共著）
- 防災冊子の発行：「BOSAIサイドブック～レジリエンスをめざして～」「BOSAIサイドブック～レジリエンスをめざして～実践編～特別支援学校における初めての福祉避難所開設訓練」（リーフレット）

☆コロナ禍でも災害は待ってくれません。「自助」としての備えは十分でしょうか。
家族との防災会議は綿密に行いたいものですね。

茨田会長 活動報告

会長の活動は全知P連ホームページ
「つれづれなるままに ～えもーしょん～」に掲載中

オンラインでの研究協議会に参加させていただきました。

中国・四国地区特別支援学校知的障害教育校PTA連合会の「令和2年度 第31回 中国・四国地区特別支援学校知的障害教育校PTA連合会研究協議会（広島大会）」が初のオンラインにて開催され、私も東京からリモートで参加させていただきました。

ハウリングというトラブルはありましたが、中国・四国地区の絆は強く、とても良い大会でした。
感動をありがとうございました。

全附連のオンライン総会を拝聴させていただきました。

＊全附連とは、国立大学附属学校教員で組織する「全国国立大学附属学校連盟」と 附属学校PTAで組織する「一般社団法人 全国国立大学附属学校PTA連合会」の総称です。

＜編集後記＞

今号は、障害のある子供たちの可能性を伸ばし、社会参加を応援してくださっている方々を特集しました。いかがでしたでしょうか。寄り添ってくださる心のあたたかさ。秘めた力を引き出すパワー。障害のあるなしに関わらずともに楽しみ、生きる未来。取材をする中で感じた、たくさんの想いを、皆さまにお伝えできましたら幸いです。今回、取材にご協力いただきました皆さまに、編集委員一同、心より感謝申し上げます。

昨年は、連日、新型コロナウイルス感染症のニュースに明け暮れました。今年はどうか明るい見通しが持てますように・・・。
本年もどうぞよろしくお願いいたします。

【編集・発行】 全国特別支援学校知的障害教育校PTA連合会事務局
〒105-0012 東京都港区芝大門1-5-3 ヤマシタ芝大門ビル5階
TEL 03 - 3433 - 7651 FAX 03 - 3433 - 7652
E-mail：info@zenchipren.jp
http://www.zenchipren.jp/
【印 刷】 株式会社 創新社